



Interview File 6 手話通訳コーディネーター 郷間秀美、川上恵、竹内かおり、伊藤奈央

2025年11月26日（水）、東京2025デフリンピックは多くの熱気に包まれながら幕を閉じました。

大会には、競技団体や各国選手団などに帯同した通訳者をはじめ、さまざまな言語通訳者がそれぞれの場面でコミュニケーションの架け橋となり、共に大会を創ってくれました。

その中で今回、私たちデフリンピック準備運営本部の手話通訳コーディネーターとして約240名の手話言語通訳者の配置などを統括し、自身も日本手話言語通訳、あるいは国際手話通訳として現場で活躍した総務部 総務・人事グループのメンバー郷間秀美さん、川上恵さん、竹内かおりさん、伊藤奈央さん（写真左から）にインタビューしました。

大会時、手話言語通訳者はどのような場面で活動していたのか改めて教えてください。

伊藤（日本手話言語通訳）：開閉会式、スポーツディレクターの対応(技術会議・試合抗議等)、記者会見、選手団長会議、競技会場対応、表彰式、競技動画配信、VIP 対応など、大会運営全般での通訳を行っていました。

大会で通訳をするにあたって、皆さんどのような準備をされていたのでしょうか。

郷間（日本手話言語通訳）：国際大会ということで、国際手話通訳者、日本手話言語通訳者の協働通訳について学びました。普段は国際手話通訳者と一緒に仕事をすることがないので、私も含め多くの通訳者にとって初めての経験でした。



ペアになる相手の背景（地域や世代など）によって手話表現が異なることがあり、その方の手話言語に慣れることや事前の情報共有の重要性を感じています。協働通訳の準備をする過程で、お互いに

高めあうことの大切さを改めて実感しました。

実際にシフトが決まってから、担当する競技の参加国や選手情報、競技ルールなどを事前に調べて準備しました。（手話通訳コーディネーターは開閉会式や記者会見だけでなく、競技会場で手話通訳者が不足する場面でスポット的に手話通訳業務を担っていました。）

伊藤：私も日頃からろう者や手話言語学習者が集まる場所に積極的に顔を出したり、デフアスリートに関する映像や記事を見たりして情報収集していました。

記者会見では多くの手話言語通訳者が活躍していましたね。状況に応じてフォーメーションを組み替えていたようですが、どのようなところに苦心されましたか。



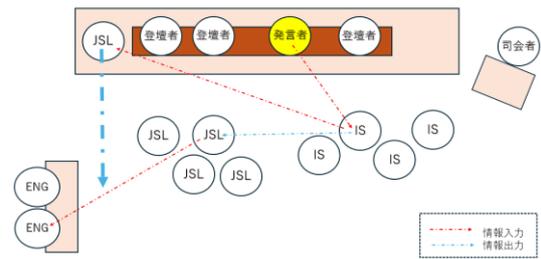
写真：紺色のウェアが手話言語通訳者

川上（日本手話言語通訳/国際手話通訳）：今回協働通訳ということで、国際手話通訳者と日本手話言語通訳者がペアになりました。これを世界的には“CO通訳”と言います。例えば、国際会議などでは、状況に応じて日本手話言語通訳者とアメリカ手話通訳者のペアだったり、イ

ギリス手話通訳者とペアになったりといろいろな言語通訳者とペアになっていくわけです。(東京 2025 デフリンピックの場合は、国際手話通訳はろう者が担い、日本手話言語通訳はきこえる人が担うことが多かった。) ろう者ときこえる人が対等な立場の言語通訳者として協働します。コミュニケーションをきちんとつないで正しい情報を伝えていくという目的に向かい、連携調整もしなければなりません。



記者会見の場合も同じです。今回難しかったのはさまざまな言語があるということ。国際手話、日本手話言語、英語、日本語もある。さまざまな言語が重なりあった現場で通訳しなくてははいけなかったので、それぞれの通訳者が役割を分担し、協力しあいます。国際手話を日本手話言語に通訳し、日本手話言語を読み取って音声日本語にする。1人でも通訳者が抜けてしまうとバランスが崩れてしまいます。それくらいチームワークが大切なのです。この連携をスムーズにするための調整が大変でした。



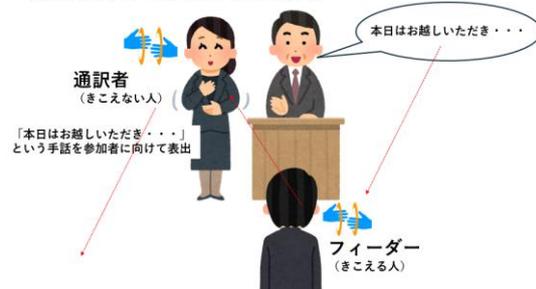
JSL:日本手話言語通訳
IS:国際手話通訳
ENG:英語音声通訳

郷間:普段の通訳現場では単独で日本手話言語と音声日本語間の通訳をする場合と、複数の通訳者が関わる協働通訳の体制で行う場合があります。協働通訳の場合には、ろう通訳者とペアになるケースもあり、チームとして対応しています。

日本手話言語⇄音声日本語の通訳例
(通訳者がきこえる人の場合)



日本手話言語⇄音声日本語の通訳例
(通訳者がきこえない人の場合)

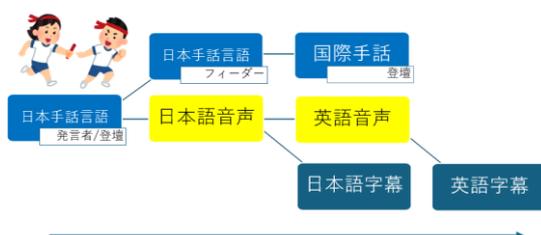


ただ、地域によっては十分に協働体制が整っていないところもあります。デフリンピックを契機に、ろう通訳の必要性や

通訳者同士がチームとして協働できる体制を整えることの重要性を広く共有していきたいと思います。こうした取り組みにより、通訳の質を高めるとともに、ろう者にとってより適切でわかりやすい情報保障の実現が期待されます。

竹内（日本手話言語通訳/国際手話通訳）：国際会議などでの現場経験が豊富な川上さんの話を聞き、状況に合わせて対応することが大切だと感じました。例えば日本手話言語で発言するろう者が多い場合、ろう者の日本手話言語を読み取って音声日本語に変えるところが鍵になります。手話を読み取れない場合、通訳のバトンがうまく渡らなくなります。

登壇者が日本手話言語で発言する場合



また、国際手話で発言するろう者が多い場合、それを読み取って適切な日本手話言語に通訳できる人を配置する必要があります。記者会見とプレス説明会では、毎回登壇者や参加者が異なりました。外国人、きこえる人、ろう者の比率が違ったので、情報保障に漏れがないようにその都度チーム編成していきました。やはり一番大切なのは、過不足なく通訳するだけでなく、臨機応変な対応といったプラスアルファの技術です。そうしたことが求められる現場において、チームで支えあい進めてきました。

川上：通訳者は「ろう者」「きこえる人」という区分で見られがちですが、私

たちはそうではなく、それぞれがどの言語の通訳をするのかを基準に、組み合わせを考えて調整しました。

記者会見の通訳では、通訳者全員がそれぞれの役割を十分に果たせなければ成功しません。うまくいかなかった場合、何が良くなかったのかを見直すことも大切でした。CO通訳として目指すべき姿は、どの現場でも共通していると思います。プロとしての専門性を持ち、現場ごとに学び続ける姿勢が大切です。その考え方が、デフリンピックを契機に日本の手話言語通訳の分野にも広がってほしいと願っています。



ろう者・きこえる人に関係なく、互いに協力しながら取り組み、社会全体の情報保障の水準を高めていくことが大切だと考えています。例えば、ろう者の話した日本手話言語を、稚拙な日本語で読み取り音声にしてしまった場合など、通訳者の技術が低ければ、ろう者そのものが低く見られてしまう恐れがあります。一方で、通訳者の技術が高ければ、ろう者が不当に低く見られることはありません。

それほど、通訳者の担う責任は大きいのです。

川上さんはどのような現場で通訳経験を積んでこられましたか。

川上：国際会議や学術会議などです。海外での視察に同行し、通訳を担当することもありました。そのため、高い専門性が求められる現場が多かったですね。補足すると、アメリカの大学院で通訳を専攻しており、国際手話通訳についても、主に国際会議や専門性の高い技術分野の現場で経験を積んできました。

手話言語通訳の専門性を育むには、どのような仕組みが必要だとお考えですか。

川上：現在日本では、地域で手話言語を学ぶ機会が多い状況ですが、デフリンピックを契機に学問として専門的に手話言語通訳を学んでいくことの必要性を、改めて考えていけたらと思います。今回のデフリンピックは、日本の手話言語通訳者が抱える課題を、良い意味で明らかにする機会となりました。顕在化した課題を共有し、共に考えていくことが大切です。そのためには、日本の手話言語通訳者を計画的かつ専門的に育てていく必要があります。また、手話が言語であることをきちんと理解していることが大事だと思います。現在は、手話を学びながら通訳を学んでいるという方が多いのですが、それが大きな課題です。理論的に手話言語通訳技術を学ぶ場が必要であり、ワークショップや専門教育を通じて倫理や翻訳技術を習得し、専門性を高めることが求められます。手話通訳はボランティアではなく、音声通訳と同等に、専門性を持って社会で活躍してほしいと思っています。

竹内：歴史的背景として、戦後の生活再建が求められる中で、ろう者は手話言語通訳者の助けを受けながら、自らの生活を向上させてきました。戦後当時は、ろう者はきこえる人の支援を受けなければ生活が成り立たない状況があったと言えます。



その後、ろう者は自ら手話言語通訳を依頼し、通訳を利用しながら主体的に生活を営むようになっていきました。一方で通訳者も、「手助けをする」立場ではなく、ろう者と適切な関係性を築き、守秘義務をはじめとした倫理観を持った言語通訳者としての役割と責任を自覚することが重要になってきたのです。また、ろう者には「言語文化のマイノリティ」という側面と、「聴覚障害者としての側面」の2つがあります。今後人材を育てていく中で、通訳の専門性はもちろん必要ですが、「ろう者学」※1を学ぶことも大切です。ろう者を障害という見方ではなく、言語文化的側面から捉えたうえで手話言語を学んでほしいからです。医学モデルではなく、社会モデルとして見るということ。ろう者学という学問を学べ

る場を作ることが社会の変化につながるのではないのでしょうか。

川上：必要なのは数の多さではなく、質の高さだと思っています。ワイン造りの例がとても印象に残っています。どなたのお話だったかは定かではないのですが、ただ量を増やせば良いわけではなく、上質なワインを生み出すためには、時間をかけてじっくり熟成させることが大切だ、という内容でした。長い年月を経てこそ、深みのあるワインが完成します。これは手話言語通訳も同じだと思います。学ぶ場をきちんと整え、時間をかけて育成しながら、徐々に数を増やしていくことが大切です。仮に数だけを増やしたとしても、それで本当に「おいしいワイン」ができたと言えるのかということ、そうではないですよ。今こそ、こうした考え方が必要だと感じています。

今回のデフリンピックでの経験を振り返り、どのように感じていますか。



郷間：日本では、ろう者自身が通訳を学ぶ場がまだ十分に整っていないと思います。今後、ろう通訳※2として学ぶ場が整っていくことを期待したいです。きこえる人である通訳者の手話言語がろう者に伝わりにくい時があります。そういう時

に、手話言語を母語とするろう通訳者がいると助かります。こうしたニーズもこれから増えていくのではないかと思います。

伊藤：これまでフィーダー※3としての経験はあまりなかったのですが、デフリンピックを通して、フィーダーの役割はとても重要だと感じました。「通訳者」という“フィルター”を通して情報が伝わっていくので、そのフィルターの目が粗くならないように、情報ができるだけ発信者の意図や温度感も含め等価で、かつタイムラグなく伝わるよう意識しました。また、実践を通して、フィーダーが伝える相手（今回の場合は国際手話通訳者）によって、求める手話表出の方法が違うということも学びました。



手話言語のスピードは人によって異なるので、フィーダーは伝える相手に合わせて臨機応変に調整して手話表出していかなければなりません。簡単なことではありませんが、連携がうまくいったときにはチームとして、様々な言語を自分たちを通して伝えることができたという感覚を味わうことができ、大きなやりがい

感じました。このような経験をさせていただいたことに感謝しています。

川上さん、竹内さんはろう通訳者のロールモデルとして、ろうの子ども達や後進に伝えていきたいことがあれば教えてください。

川上：国際手話通訳という点もそうですが、私たちろう者もきこえる人と一緒に仕事ができるということをお見せできたと思います。ろう者だけ、きこえる人だけというのではなく、『共に仕事ができる方法がある』ということです。例えば通訳者として、ろう者ときこえる人が一緒に仕事ができること、ろう者だからきこえる人だからということではなく、平等に自分の力を発揮しあって一緒に進めていくことができる、これが東京2025 デフリンピックの大きな成果だったと思っています。



また、いろんな方が、手話言語ができる・できないにかかわらず、身振りや筆談、手話言語など、いろいろな方法でコミュニケーションを取っている姿がありました。そうした様子を通して、ろうの子どもたちに、「こういうやり方もあるんだ」「方法は一つではないんだ」と示せたことは、大きな成果だったと思います。

竹内：今までは世界ろう者会議や、ろう世界大会等のろう者の大会の場での手話言語通訳を行ってきましたが、今回は首都であり、開催都市東京という現場でろう者・きこえる人が協働することが求められました。ろう者だけに限られた場ではなく、きこえる人も共存していて、それをいろいろな人に見ていただける。このような機会そのものが素晴らしいものだったと思っています。

デフリンピックはそれぞれの選手が輝く場であり、自分の力を発揮する場ですが、その裏で通訳者やボランティア、コーディネーターが1人1人一生懸命にそれぞれの業務に取り組んでいました。私たちもその一員になれたことを非常にうれしく思います。

手話言語を全く知らない、ろう者のこともきっと知らなかった方々と共に、デフリンピックのためにみんなで進めてきたことに価値があり、それぞれが成長できたと思っています。

それだけではなく、東京2025 デフリンピックに登録してくれた約140名の日本手話言語通訳者と約100名の国際手話通訳者というこれまでに経験のない規模の手話言語通訳者の調整を行いました。約240名の方々に、デフリンピックを通して、成長する環境を提供することができた、成長する手助けができたことが良かったと思っています。このような貴重な機会をいただき、デフリンピック準備運営本部をはじめとする関係者の皆様に大変感謝しています。

高度な専門性で 東京2025 デフリンピックを支えてくれたすべての言語通訳者たちに心からの感謝と深い敬意を捧げます。

※1 『ろう者学』とは、英語の「Deaf Studies、デフスタディーズ」を日本語に訳した名称です。ろう者、難聴者、盲ろう者や彼たちを取り巻く人たちが過去から現在に至るまでたどってきた歴史をはじめ、手話やろう文化、ろう教育、人権など様々な領域を横断しつつ、聴こえの状況に焦点を当てるのではなく、言語文化的な視点からろう難聴の生き方や考え方などに関して研究する学問でもあります。[ろう者学とは？ | ろう者学教育コンテンツ開発プロジェクト - 国立大学法人 筑波技術大学](#)

※1 ろう通訳：手話言語通訳を行う人がろう者である場合に英語では Deaf Interpreter (DI) と言い、直訳するとろう通訳者となります。

※2 フィーダー：通訳者が2名で通訳する場合、起点言語を通訳してもう一人の通訳者に伝える（フィードする）役割の人のことです。起点言語が音声言語の場合、きこえる通訳者がろう通訳者にフィードすることが多いです。逆に起点言語が手話言語である場合は、ろう通訳者がきこえる通訳者にフィードすることが多いです。起点言語と目標言語がどちらも手話言語である場合ろう通訳者もきこえる通訳者もフィーダーになることができます。この考え方はアメリカのろう通訳制度を元にした考え方で、(一財)全日本ろうあ連盟では上記の言葉の使い方を含め、ろう者による通訳については検討中です。

編集後記：

この記事を作成するきっかけとなったのは、デフリンピック準備運営本部総務部広報グループが企画運営を担った、東京2025 デフリンピック公式記者会見時に

活躍してくれた手話通訳者さん達のあまりのカッコよさに、強く心を打たれたことでした。

このようなスペシャリスト集団の裏側を是非ともたくさんの人に伝えたいと思い、今回のインタビューをお願いしました。

本インタビューを担った広報担当者のコメントもおまけとして掲載いたします。

井谷：デフリンピックを多くの人に身近に感じてもらうことを目指して始めたインタビュー企画『Wonderful×Deaf』。インタビューをすることも、それを記事にすることも初めての経験でした。ろう者の文化、デフスポーツについて、何も知らなかった私にはとても刺激的で、インタビューを行うたびに学ぶことが多くありました。高校卒業まで運動部に所属していたので、アスリートの皆さんが話す競技の話は身近に感じることもありましたが、運動部に所属していたからこそきこえない、きこえにくい状態でスポーツをすることの難しさにいつも驚き続けていて、写真撮影の手を止めて横から質問をしてしまうなんてこともありました。この『Wonderful×Deaf』企画を通じて、見てくれた方がデフスポーツとデフリンピックに興味を少しでも持ってくださ、今後のデフスポーツの試合や大会に足を運んでもらえるととてもうれしく感じます。

渡部：シリーズでお届けしてきたインタビュー企画。取り組みを始めるにあたり、国内外さまざまなデフアスリートとお会いしてきました。競技に向き合うひたむきな姿勢、そして知れば知るほど魅力的な人柄。素敵な選手ばかりであったことから、『Wonderful×Deaf』というタイトルが生まれました。インタビューに協力してくれた選手たちは、きこえない、きこえにくいことで日常の中でどのような困り事があるのかも率直に語ってくれました。沢山のデフアスリートとの出会い、そして手話言語通訳コーディネーターと協力して記者会見を運営できた経験は、私にとって貴重な財産です。この連載を通して、きこえない、きこえにくいことへの『気づき』に繋がることができたら嬉しく思います。情報保障の重要性を含め、社会の理解がさらに深まるよう、私自身これからも日々行動していきたいと思っています。

大田原：今回の記事では、記者会見という場における情報保障についてスペシャリスト集団へのインタビューを行うことができました。本記事を通して、情報保障をデフリンピックという特別な場面に限らず、会社や学校、そして日常のさまざまな場面において、きこえない・きこえにくい人、きこえる人を含むすべての人に、誰一人取り残されることなく、同じ情報が行き届いているかを、改めて立ち止まって考えるきっかけとなれば嬉しく思います。

また、私は『Wonderful×Deaf』の企画を通して、みる力を活かしたデフスポーツならではの魅力をたくさん知ることができました。ぜひ過去に掲載した記事もお読みいただけると嬉しいです！